

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）

令和2年度（2020年度）発生予報第12号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和2年度（2020年度）病虫害発生予報第12号（3月予報）

I 気象予報：令和3年（2021年）2月25日福岡管区气象台発表（単位：％）

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	10	20	70
	降水量	20	40	40
	日照時間	40	40	20

II 【今後、注意すべき病虫害】

1 発生の概要

作物	病虫害名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
茶	カンザワハダニ	やや多	並	やや多(+)	—	気温高(+) 降水多～並 (-)	
カン キツ	かいよう病	やや多	並	やや多(+)	—	気温高(+) 降水多～並 (+)	
	ミカンハダニ	多	並	多(+)	—	気温高(+) 降水多～並 (-)	
冬春 トマト	灰色かび病	やや多	並	並(±)	やや多～ やや少(±)	降水多～並 (+)	
	葉かび病	やや少	少	やや少(-)	並～やや少 (-)	降水多～並 (+)	
	すすかび病	やや少	並	やや少(-)	並～やや少 (-)	降水多～並 (+)	



作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春 トマト	黄化葉巻病	並	やや多	黄化葉巻病 並(±) コナジラミ 並(±)	黄化葉巻病 並～少 (-) コナジラミ 並(±)	コナジラミ 気温高 (+)	
冬春 ナス	すすかび病	並	並	並(±)	並～やや少 (-)	降水多～並 (+)	
キュウリ	うどんこ病	並	やや多	並(±)	並(±)	降水多～並 (+)	
	べと病	やや多	やや多	やや多(+)	やや多(+)	降水多～並 (+)	
ウリ科 野菜	キュウリ・メロン 退緑黄化病 スイカ退緑えそ病	やや多	やや多	退緑黄化病 多(+) コナジラミ 多(+)	キュウリ やや多 メロン 並 スイカ 並～やや少 (±)	コナジラミ 気温高 (+)	
イチゴ	うどんこ病	並	並	やや少(-)	やや多～少 (-)	降水多～並 (+)	
	ハダニ類	やや多	多	並(±)	多～やや多 (+)	気温高 (+)	
	アザミウマ類	やや多	やや多	やや多(+)	やや多～並 (+)	気温高 (+)	
冬春 果菜類	灰色かび病 (トマト除く)	やや多	やや多	ナス やや多 イチゴ 並 キュウリ 並 (+)	イチゴ やや多～並 キュウリ 並 ナス 並～少 (-)	降水多～並 (+)	



作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春 果菜類	コナジラミ類	やや多	やや多	キュウリ 多 ナス やや多 トマト 並 イチゴ 並 (+)	スイカ 並 メロン 並 トマト 並 イチゴ 並 キュウリ 並 ナス 並～少 (±)	気温高 (+)	
	アザミウマ類 (イチゴ除く)	並	並	ナス 並 キュウリ やや少 (-)	ナス 並～やや少 キュウリ やや少 (-)	気温高 (+)	
	菌核病	並	並	キュウリ 並 (±)	スイカ 並～やや少 (-)	降水多～並 (+)	
	アブラムシ類	やや多	やや多	イチゴ やや多 トマト 並 ナス 並 キュウリ 並 (+)	イチゴ やや多 トマト 並 キュウリ 並 メロン 並 ナス 並～やや少 スイカ 並～やや少 (±)	気温高 (+)	

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。



2 予想発生量、根拠、対策等

◎茶

1) カンザワハダニ

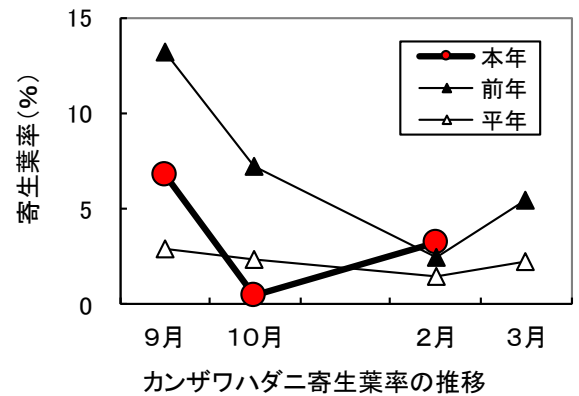
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では寄生葉率3.3%（平年1.5%）と平年比やや多の発生であった（+）。

イ 3月の平均気温は平年より高い予想であるため、ハダニの活動が活発になることが考えられる。

(3) 対策 ア **3 防除のポイント等の「茶のカンザワハダニの発生に注意しましょう」**を参考に対策を行う。

イ 防除にあたっては、薬剤が葉裏まで届くよう規定の散布量で丁寧に散布する。
ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎カンキツ

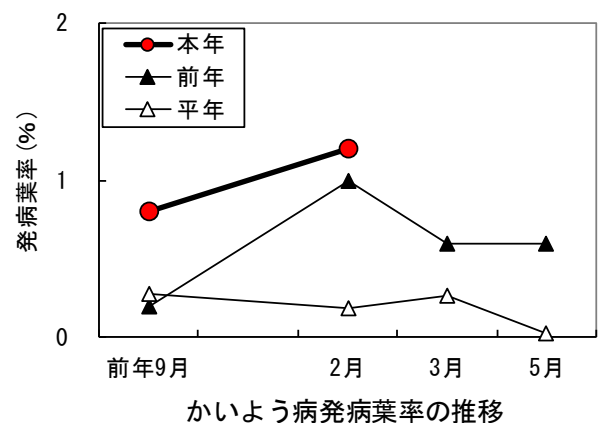
1) かいよう病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、発病葉率1.2%（平年0.3%）で、平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 伝染源は、前年に葉や枝に形成され越冬した病斑である。伝染源が多い場合は、その後の発生も多くなるので、発病した葉や枝の剪除を徹底する。

イ 春先の発病が多い場合には、果実への感染も多くなるので、発芽期の防除適期を逃さないよう注意する。



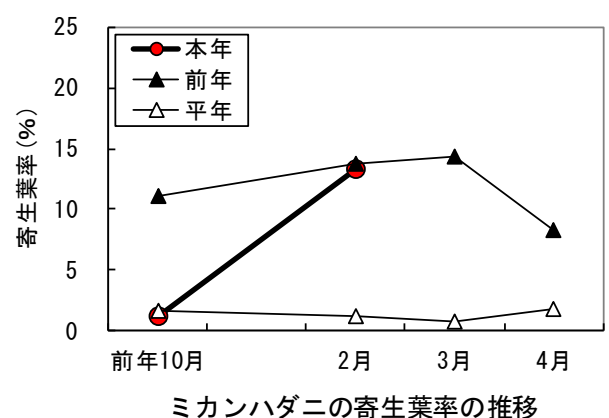
2) ミカンハダニ

(1) 発生量：多

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、寄生葉率13.3%（平年2.4%）、寄生頭数3.7頭/10葉（平年0.7頭/10葉）で平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア ミカンハダニの寄生密度が上昇すると防除が困難になるため、発芽前にマシン油乳剤を散布し、初期密度を下げる。ただし、樹勢の弱い園ではマシン油乳剤の散布を控える。

イ 越冬期にマシン油乳剤を散布しなかったほ場では、ミカンハダニの発生に注意し、4月以降の薬剤防除を徹底する。



◎冬春トマト

1) 灰色かび病

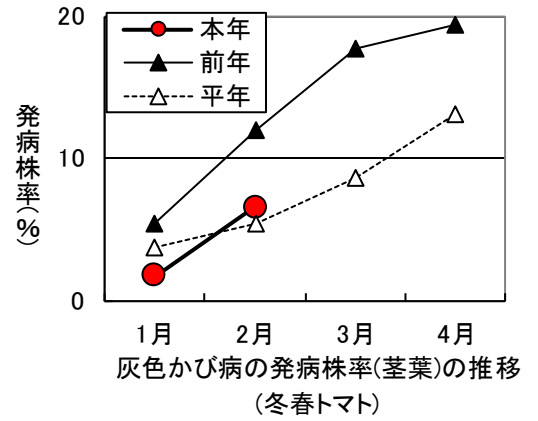
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、茎葉で発病株率6.6% (平年5.4%)、果実で発病株率0.6% (平年0.1%) で平年並の発生であった(±)。

(3) 対策 ア 発病果、発病葉、花卉は伝染源となるので、早期に除去し処分する。

イ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) 葉かび病

(1) 発生量：やや少

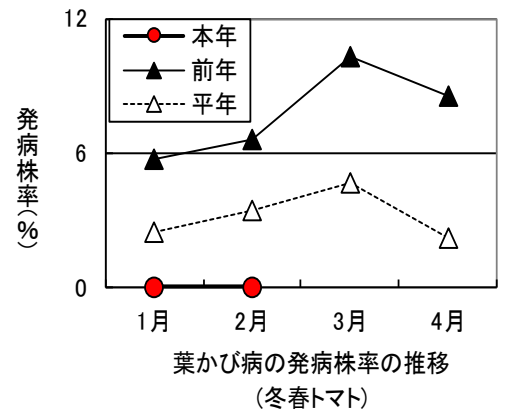
(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、発生を認めず(発病株率平年3.4%) 平年比やや少の発生であった(-)。

(3) 対策 ア 抵抗性品種であっても発病に注意し、発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

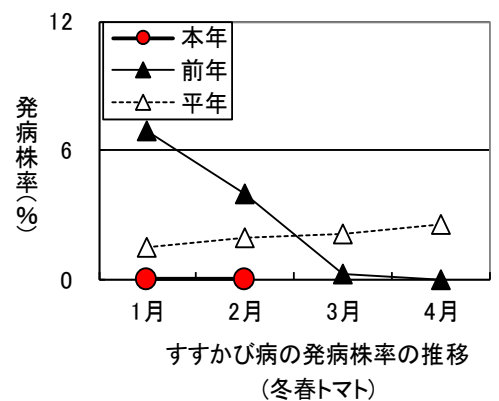
ウ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



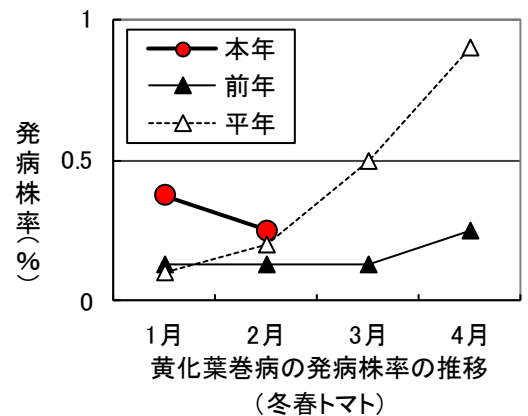
3) すすかび病

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、発生を認めず（発病株率平年1.9%）平年比やや少の発生であった（－）。
- (3) 対策 ア 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。
イ 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。
ウ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。
エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



4) 黄化葉巻病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、発病株率0.3%（平年0.3%）で、平年並の発生であった（±）。
イ 同月の巡回調査では、コナジラミ類の寄生葉率0.7%（平年0.1%）で平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策 ア 定植後、現在までに発生したほ場では、今後発生が増えることが懸念される。気温が高まると、タバココナジラミの活動が活発になるため、保毒虫を増やさないようにタバココナジラミの対策を徹底する。
イ 保毒虫を施設内で「増やさない」対策および「出さない」対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。



◎冬春ナス

1) すすかび病

(1) 発生量：並

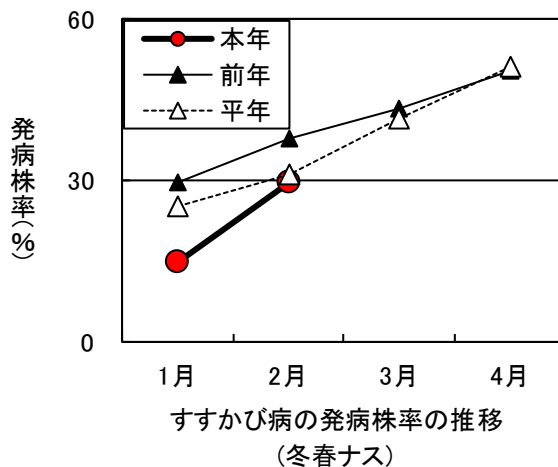
(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、発病株率29.6%（平年31.2%）で平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

ウ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎キュウリ

1) うどんこ病

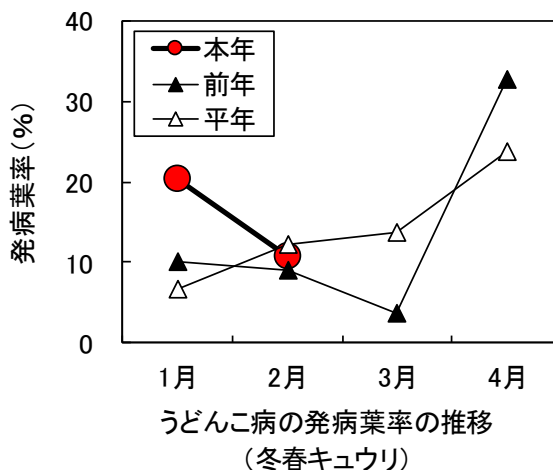
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、発病株率10.8%（平年12.3%）で平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 多発生後は防除が困難なので、初期防除を徹底する。

イ 薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) ベと病

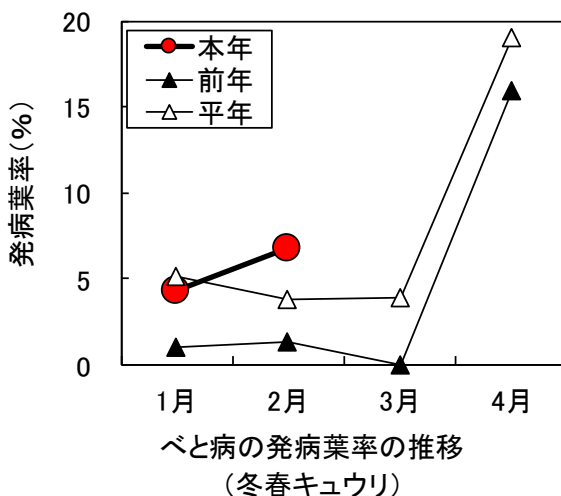
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、発病株率6.8%（平年3.8%）で平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 湿度が高い条件や肥料切れで多発するので、過湿を避け、肥培管理に注意する。

イ 多発生後は防除が困難なので初期防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎ウリ科野菜

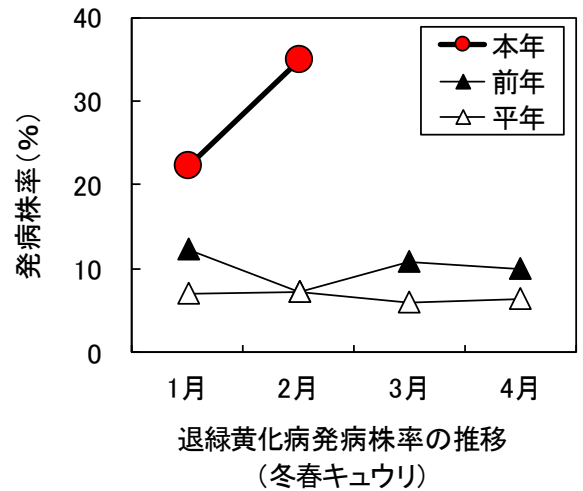
1) キュウリ・メロン退緑黄化病、スイカ退緑えそ病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、キュウリで発病株率34.8%（平年7.2%）で平年比多の発生であった（+）。

イ 2月の巡回調査では、キュウリでタバココナジラミの寄生葉率8.8%（平年0.7%）で平年多であった（+）。

(3) 対策 ア 保毒虫を施設内で「増やさない」対策および施設外に「出さない」対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。



◎イチゴ

1) うどんこ病

(1) 発生量：並

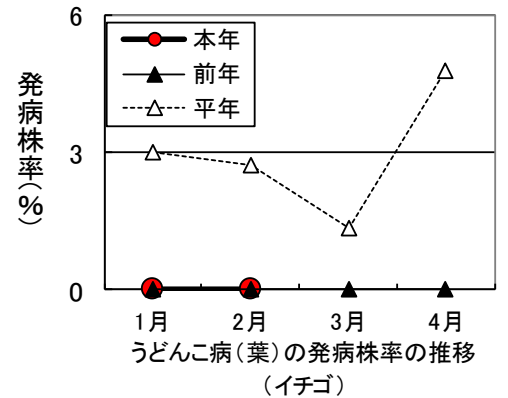
(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、葉・果実とも発生を認めず（平年発病株率2.7%）やや少の発生であった（-）。

(3) 対策 ア 多発生後は防除が困難なので、初期防除を徹底する。

イ 発病果、発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

ウ 薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) ハダニ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、寄生葉率18.3% (平年20.7%) で平年並の発生であった(±)。

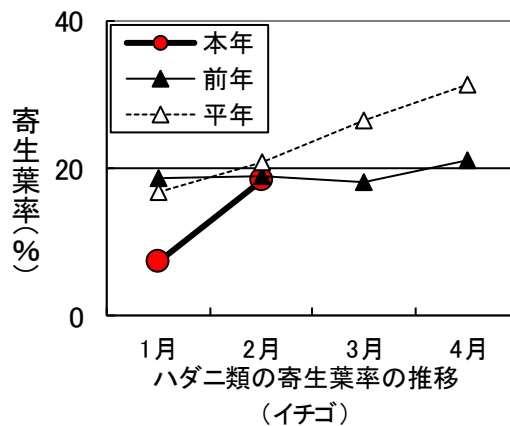
(3) 対策 ア 2月の巡回調査において、一部で多発生しているほ場が見られる。現在発生が少ないほ場でも、気温が上昇すると、急激に増加するため、発生初期に防除を徹底する(3 防除のポイント等の「イチゴにおけるハダニ類の防除対策」を参照)。

イ 寄生葉を早めに取り除き、ほ場外に処分する。

ウ 薬剤防除の際、事前に下葉かぎを行い、葉裏にも十分かかるように丁寧に散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

オ 天敵(カブリダニ類)を放飼したほ場でハダニ類が発生している場合は、天敵に影響の少ない薬剤の散布や天敵の追加放飼を行う。なお、それでも発生が多いほ場では、効果の高い殺ダニ剤を使用した上で、薬剤を主体とした防除体系に切り替える。



3) アザミウマ類

(1) 発生量：やや多

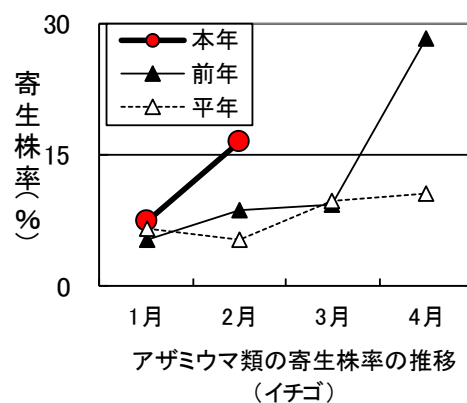
(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、寄生株率16.3% (平年5.3%) で平年比やや多の発生であった(+)

(3) 対策 ア これからの時期は、施設内での発生が増加するので、花を注意深く観察することで早期に発見し、発生初期からの防除を徹底する。

イ 施設内外の雑草は、重要な発生源となるので除草を徹底する。

ウ 薬剤防除にあたっては、天敵や訪花昆虫(ミツバチ等)への影響を考慮し、薬剤を選定する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎冬春果菜類

1) 灰色かび病 (トマト除く)

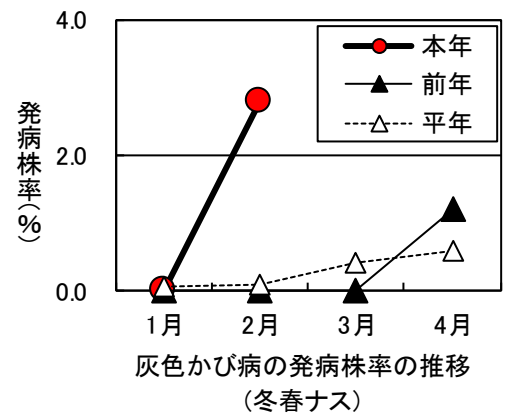
(1) 発生量: やや多

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、ナスで発病株率2.8% (平年0.1%) で平年比やや多、イチゴ葉・果実、キュウリで発生を認めず (イチゴ葉平年0.2%、イチゴ果実平年0.1%、キュウリ平年0.8%) 平年並の発生であった (+)。

(3) 対策 ア 発病果、発病葉、花卉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

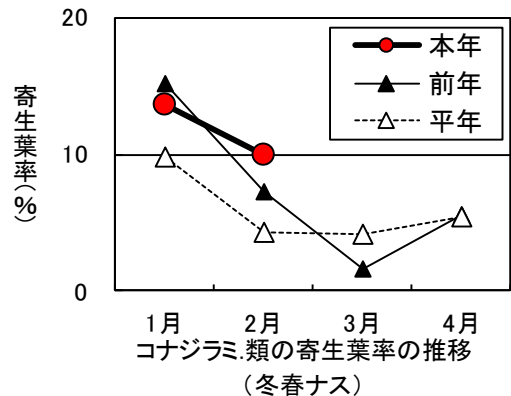
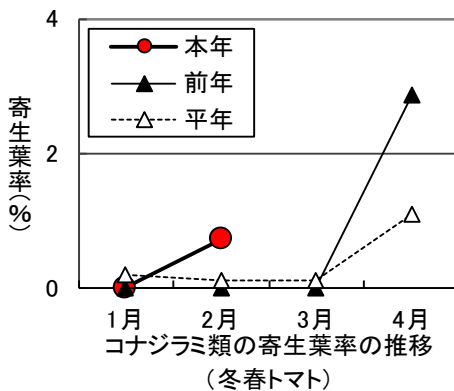
ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) コナジラミ類

(1) 発生量: やや多

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、キュウリで寄生葉率8.8% (平年0.7%) で平年比多、ナスで10.0% (平年4.3%) で平年比やや多、トマトで0.7% (平年0.1%)、イチゴでは寄生を認めず (平年0.0%) 平年並の発生であった (+)。



(3) 対策 ア タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する (3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照)。

イ 施設内部の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3) アザミウマ類 (イチゴ除く)

(1) 発生量：並

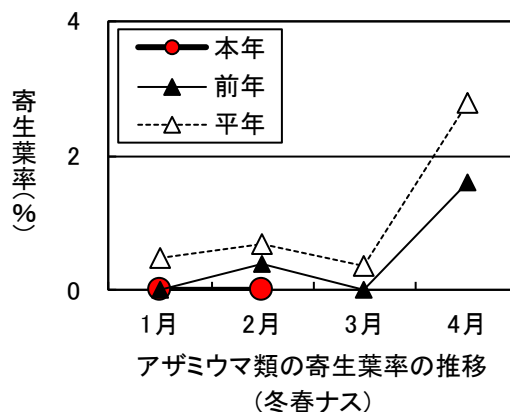
(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、ナス、キュウリで寄生を認めず(ナス寄生葉率平年0.7%、キュウリ平年1.5%)、ナス平年並、キュウリ平年比やや少の発生であった(ー)。

(3) 対策 ア これからの時期は、施設内での発生が増加するので、粘着トラップ等を設置し、早期発見に努め、早期防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する(3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照)。

ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



アザミウマ類の寄生葉率の推移 (冬春ナス)

4) 菌核病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、キュウリで発病株は確認されず(発病株率平年0.0%)、平年並の発生であった(±)。

(3) 対策 ア 発生後は防除が困難なので、予防防除を徹底する。

イ 被害残渣や果実は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

ウ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。

さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

5) アブラムシ類

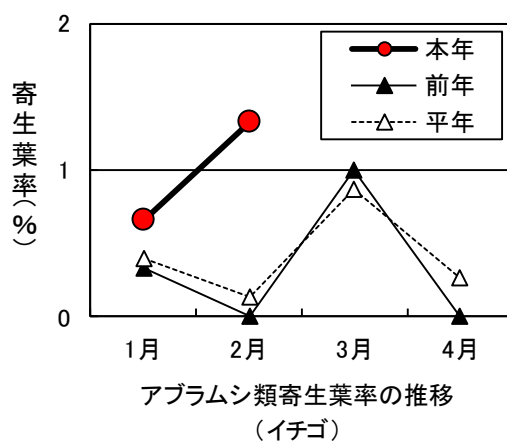
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、イチゴで寄生葉率1.3%(平年0.1%)で平年比やや多、トマト、ナス、キュウリで寄生を認めず(トマト寄生葉率平年0.0%、ナス0.0%、キュウリ0.0%)平年並の発生であった(+)

(3) 対策 ア 気温の上昇に伴い、有翅虫の飛来が多くなるため、施設開口部等への防虫ネット展張によりほ場内への侵入を防ぐ。

イ 吸汁によってウイルスを媒介するため、発生に注意し、発生初期の防除を徹底する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



アブラムシ類寄生葉率の推移 (イチゴ)



3 防除のポイント等

茶のカンザワハダニの発生に注意しましょう

カンザワハダニは、平均気温が7～8℃以上になると産卵を開始し、10℃を超えると産卵が活発になります。

防除対策は、平均気温が10℃以上になる3月中旬から下旬頃からとなりますが、気象予報によると3月の気温は平年より高い予想であるため、例年より早くカンザワハダニの活動が活発になり、防除適期も早まることが予想されます。

一番茶萌芽前の防除の良否が年間の発生量を左右しますので、茶園での発生状況をよく観察し、要防除水準（3月上旬：寄生葉率2%）を超えている園では、防除時期を逸しないよう適期に防除を行いましょう。

果樹類の春先の病害虫防除について

福岡管区気象台が2月25日に発表した九州北部地方の1か月予報によると、向こう1か月の気温は平年より高く推移すると見込まれています。病害虫の発生や樹の生育が平年より早まることが予想されますので、防除適期を逃さないよう対策を実施しましょう。

<カンキツ>

1 ミカンハダニは、発芽前のマシン油乳剤散布により初期密度を抑制しましょう。散布の際は、樹全体にムラなくかかるようしっかり丁寧に散布しましょう。なお、マシン油乳剤は樹勢の弱い樹に悪影響を及ぼす場合や発芽後の高濃度散布で薬害が生じる場合がありますので、樹勢や使用時期・使用方法に注意して使用しましょう。

2 かいよう病は、前年に発病した旧葉や枝が初期感染源となり、3月中旬以降の降雨により、葉の病斑から菌が流れだし、感染が始まります。薬剤による防除は、発芽前の防除が特に重要であり、発芽前～5月の予防を徹底しましょう。

3 そうか病は、旧葉の病斑が伝染源となるため、昨年発生が多かった園では特に注意が必要です。薬剤防除では、初期の予防が重要であるため、幼芽期（新芽が5mm以内）の防除適期を逃さないよう注意しましょう。

<ナシ>

黒星病は、展葉直後から感染し始め、発病するまでの潜伏期間が14日以上あります。感染に気付かず薬剤防除が遅れると多発するため、予防散布を徹底しましょう。特に、3月中下旬の萌芽初期、3月下旬から4月上旬の開花期は、最も重要な防除時期となるため、薬剤を散布するタイミングを逃さないよう注意しましょう。



野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これら微小害虫は、気温が高くなると活動が活発になりますので、今後、ウイルスを持った虫（保毒虫）の施設外への拡散によるウイルス病の発生が懸念されます。

そこで、確実にウイルスの伝染環（つながり）を絶ち、地域におけるウイルス病の拡大を防ぐため、以下の2つの対策を必ず行いましょう。

I. 保毒虫を「増やさない」対策

施設内で微小害虫を増やさないようにし、栽培終了後に保毒虫が野外へ飛び出す危険性を減らしましょう。

- ① 発病株は重要な伝染源となるので、適正に処分する。
- ② ハウス内に粘着トラップを設置し、害虫の密度を低下させる。
- ③ コナジラミ類の発生がみられる場合は、継続した防除を行う。
- ④ トマト黄化葉巻病抵抗性品種であっても、トマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV）に感染し伝染源となるため、コナジラミ類の防除を継続して行う。
- ⑤ ウリ類の連続栽培を行う場合は、保毒虫を次作に持ち越さないように防除を行う。

II. 保毒虫を施設外に「出さない」対策

次に、地域（野外）の保毒虫密度を高めないために、ハウス内から微小害虫を逃がさないようにしましょう。

- ① 定期的に施設周辺を見回り、ハウスビニルや防虫ネットに破れが無いか点検し、必要に応じて修繕を行う。
- ② 成虫に効果の高い剤を主体とした薬剤防除を行う。
- ③ 微小害虫の施設外への飛び出しを防ぐため、栽培終了後は必ずハウスを密閉してから一斉に植物を枯らす。
- ④ 悪天候等で作物の枯死に時間がかかると予想される場合には、古株枯死に使用できる薬剤の併用も検討する。なお、使用にあたっては、必ずラベルなどで使用方法を確認し、遵守する。
- ⑤ 地域で取り決めた密閉処理期間を遵守し、微小害虫及びウイルスを完全に死滅させる。
- ⑥ 施設内の片付けは、密閉処理が終了してから行う。



イチゴにおけるハダニ類の防除対策

本年は1月中旬以降、気温が平年より高く推移しており、ハダニ類の増殖に好適な条件が続いています。2月の巡回調査においても、ハダニ類が多発生しているほ場が見られるため、現在発生が少ないほ場でも、気温が上昇する春先にかけて発生が増加することが懸念されます。特に、3月以降は収穫盛期となるため防除が遅れがちになることから、早めの防除を徹底しましょう。

- ① 薬剤防除の際は、効果を高めるために事前に下葉かぎを行う。除去した葉はポリ袋に詰めるなどしてほ場外へ持ち出し、適切に処分する。
- ② 薬剤防除は、十分な液量で薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に散布し、散布むらをなくす。
- ③ 使用できる殺ダニ剤が少ない場合は気門封鎖剤などの物理的資材を積極的に活用する。気門封鎖剤は、ハダニ類に直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、卵への効果や残効性が低いため、7日程度の間隔で複数回散布する。
- ④ 未発生ほ場への持ち込みを防ぐため、ハダニ類が発生しているほ場の管理作業は最後に行う。なお、親株ほ（育苗ほ）についてはハダニ類を持ち込ませないために、管理作業は最初に行う。
- ⑤ カブリダニ類を放飼したほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を使用し、ハダニ類の密度を抑える。ただし、ハダニ類の発生が多く天敵で抑えきれない場合は、殺ダニ剤を中心とした薬剤防除に切り替える。
- ⑥ 薬剤の中にはミツバチの活動に影響を及ぼすものもあるので、影響の小さい薬剤を選択し、危害が出ないように使用する。農薬は、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守して農薬の安全使用に努める。

Ⅲ 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
冬春 トマト	疫病	並	巡回調査では、発生を認めず平年並（±）。発病後は防除が困難なので、予防に重点をおく。前年に発生が多かったほ場では、定期的に薬剤散布を行う。
スイカ	菌核病	並	防除員報告は、平年並～やや少（-）。半促成栽培では3～4月の交配期頃から発生が多くなるので発生前から予防防除に努める。発生ほ場では、菌核を残さないよう処分する。
ウリ科 野菜	つる枯病	並	防除員報告は、メロンで平年並、スイカで平年並～やや少（-）。株元周辺をできるだけ乾燥状態に保つ。窒素質肥料の多用を避け、適正な肥培管理を行う。

【野菜病害虫の共通対策事項】

- ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。
- ・多発後は防除が困難になるので、早期に発見し初期防除に努める。
- ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



IV その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病害虫防除所（生産環境研究所病害虫研究室）
（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。

※なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>